

2020年7月30日発行

春風学寮の創立と道正安治郎氏

千葉 眞



しゅんぷう
春風学寮の創立（1929年5月）と創設者の道正安治郎氏（1889～1975年）について、書かせていただきます。私自身は、春風学寮の寮生として1960年代から70年代にかけて9年間、道正氏と多賀夫人に大変お世話になりました。寮生は、ご夫妻を「先生」「奥様」ではなく「小父さん」「小母さん」と呼んでおりました。春風学寮は一つの心地よい（同時に厳粛な）家庭寮という雰囲気でした。聖書講義は1時間半ほど、弁論部上がりの机を叩いての熱弁で、「乙女のごとく静かに始まり、脱兎のごとく激しく終わる」のでした。

道正氏は福井県出身で、早稲田大学に進学し、弁論部で活躍。そして1907年頃、18歳の時、友人に連れられて初めて内村鑑三の聖書研究会に出席。その時、何も理解できなかったけれども、「神は愛である」という言葉、「先生の威風堂々たる態度と闘志満々たる容貌」、そして2時間近く「満員の講堂で紳士淑女が襟を正して静粛に聞いておられる態度」に圧倒されたと記しています。道正氏は1912年から6年間、アメリカに留学し、サンフランシスコ基督教青年会の指導者ストウジ博士との貴重な出会い。フラテニティ(学寮)で学生たちが自由と友愛の精神の下で、有意義で愉快な共同生活を送っていることに感銘しました。

帰国後、満州にわたり、満鉄調査課に勤務しました。満鉄を辞して、1929年に私財を投じ、満鉄の援助も受けて、東京世田谷の経堂に春風学寮を創設。終生、多賀夫人と共に聖日の聖書講義と共同生活を通じて、若者に福音を伝える仕事に献身。戦時中「反戦」発言のため、特高に検挙・留置されましたが、釈放。後半生、道正氏は塚本虎二に師事。総計300名余りの卒業生に慕われ、寮生たちは若き日に福音信仰とよき人生への貴重な招きを受けました。

春風学寮は昨年5月に創立90周年の節目を迎えましたが、今日なお小舘美彦寮長・知子寮母の手厚いお世話と指導の下、「神を畏れ、学を励み、自治共同の精神を養い、併せて寮生相互に愛と信頼を厚くする」という創立の精神に基づいて運営されています。日本と世界の多くの国々は、魂の飢餓状況、人生の意味喪失、アパシーとアノミー、社会の停滞など、深刻な問題をかかえております。独立学園、愛真高校、愛農学園などの学校、そして登戸学寮、言学寮、春風学寮などの学寮、福音の伝道と教育による若き魂の苗床をケアする貴重な課題に取り組んでいる共同体。どうか今後とも祈りに覚えてくださいますように！（春風学寮元寮長・理事長）

目次

表紙・巻頭言	
目次・内村鑑三の言葉	学校・学寮便り……………6
表紙について・発行趣旨……………2	各地からの報告……………9
理事長就任あいさつ……………3	定期集会・地域別特別集会等……………12
想起と継承-内村鑑三昇天90周年に寄せて……………4	事務局便り……………15
今井館資料館について……………5	維持会員募集のお知らせ・編集後記……………16

内村鑑三の言葉

夏と天然

内村鑑三

神を内より見よ。また外より見よ。霊において見よ。また物において見よ。聖書において見よ。また天然において見よ。神を一方より見て、彼を誤解するのおそれあり。夏は来たれり。われらは天然を学んで、天然を透して天然の神に達すべし。

『聖書の研究』1907年7月、『内村鑑三信仰著作集』8巻、教文館、1964年

(選：NPO法人今井館教友会前理事長 大山綱夫)

○表紙について

今号の巻頭言は、春風学寮の元寮生で寮長も務められた千葉眞さんが、学寮の創立と創設者正道安次郎・多賀夫人の思い出についてご寄稿くださった。内村鑑三の聖書研究会での様子や、学寮がアメリカのフラテニティ（学寮）に発想を得たものであったこと、また、道正夫妻が「小父さん」「小母さん」と呼ばれていたことなど、千葉さんならではの貴重な証言をいただいた。

写真は1962年ごろ、寮祭でにこやかに挨拶される正道安次郎氏。(C.Y.)

『今井館ニュース』発行趣旨

NPO法人今井館教友会は、キリスト教の精神に基づいて、今井館を維持・管理・運営し、内村鑑三（無教会の提唱者）及び彼につらなる者たちの広範かつ多面的な思想と活動を自ら調査・研究するとともに、他の個人と団体による調査・研究をも奨励・支援し、それら自他の調査・研究成果の社会一般への普及に努めて、正義と隣人愛を基調とする平和的な社会の形成と発展に寄与することを目的とする（定款第3条）。その目的を達成するため、特定非営利活動に係る事業として今井館ニュース発行を通じ「内村鑑三及び彼に連なる人々の思想と活動を調査・研究・発表する事業」を行うものとする（定款第5条3項）。